●特集 変わる大学図書館と学修支援の広がり

大学図書館とデジタル時代の創造力

柴野 京子●上智大学文学部助教

一 出版物のデジタル化をめぐって

ここ数年、出版論の授業を受講する学生に、電子出版物の利用についての簡単なアンケートを行っている。利用経験の有無と具体例を尋ねるのだが、電子機器の選択肢を用意し、具体的なコンテンツを自由に記入させると、「ケータイで漫画」のようなパターンのほかに、「PCでレポートを書く」「スマホで2ちゃんねるを読む」などと書いてくる例が少なくない。

レポートや2ちゃんねるは、もちろんいわゆる「電子書籍」ではない。だが見方を変えればこれらの「誤答」は、キンドルにダウンロードするようなイメージだけで出版物の電子化をとらえる危うさや、読み書きにおける電子端末の日用化といったデジタル社会の本質を、率直に示しているとも言える。今日の大学図書館を取り巻くのは、まさにそうした状況なのである。

そもそも大学図書館にとって資料の電子化は、電子ジャーナルの出現に伴い、早くから意識されてきた問題であった。海外の学術出版はほぼ巨大コングロマリットの傘下にあり、エルゼビアやシュプリンガーのような企業がデータベースを束ね、ビッグディールと呼ばれる方式で、各大学と契約販売をするスキームができあがっている。この利用料が高額であるうえに拘束性が強く、大学図書館を圧迫している。

文部科学省の「学術情報基盤実態調査」によれば、電子ジャーナル、電子書籍及びデータベースにかかる費用が図書館資料費に占める割合は、私立大学の場合、二〇一一年度で三七・五%に達した。これは、同省が調査を始めた二〇〇四年度の七倍以上に相当する（**図1**）。近年ではこうした事態に対応するために、国立・私立大学図書館が共同で出版社への交渉を行ったり、国立情報学研究所との連携で国内ジャーナルの環境整備などを行う動き（大学図書館コンソーシアム連合）が立ち上がっている。

このように大学図書館にとってのデジタル化問題は、まず研究支援の基盤である学術論文の提供と、経費をめぐって生じたと言えよう。そして、次の局面として現れてきたのが、教育と研究における実践的な利用である。

二 ラーニング・コモンズの背景

今回の特集でも取り上げられているラーニング・コモンズ

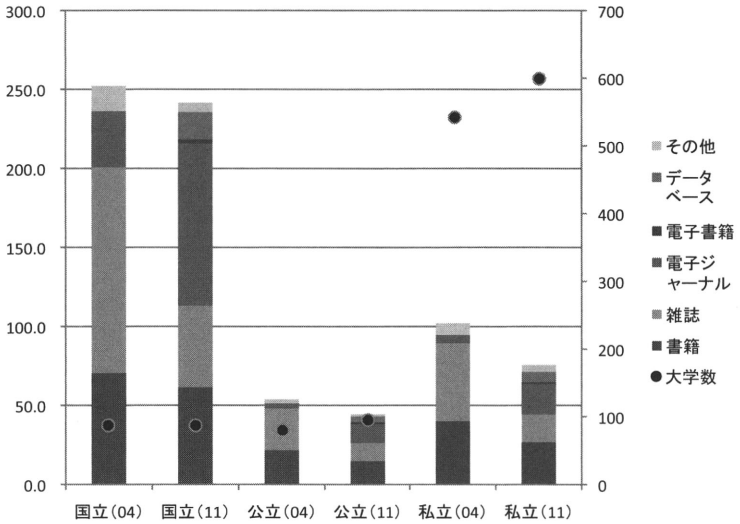
も、その代表的な事例の一つと考えることができる。ラーニング・コモンズとは、学生がグループ研究やコンテンツ製作、発表に利用できるスペースのことで、必要な設備のほか、資料探索、テーマの探し方、論文の書き方など、学習に必要な人的支援体制を備えるケースもある。

こうしたスペースが大学図書館に設けられるようになった第一の理由が、学習の仕方の変化にあることは言うまでもない。しかし二番目の理由として、資料の集積庫という物理的な図書館の役割が、デジタル化によって揺らいでいることも指摘しなければならないだろう。

先進事例の多くがよっている北米の大学図書館では、ジャーナルの電子化とは別に、グーグルブックスによる蔵書のデジタル化プロジェクトが進んでいる。二〇〇四年の発表以降、ミシガン、シカゴ、イリノイ、ハーバード、プリンストンなどの有力大学が次々に参加しており、あらかたの書籍はデジタル化されたのではないかと思われる。グーグルブックスについては、ひところ騒動になった著作権の問題に加えて、品質に対する指摘もあるが、プロジェクト参加校がコンソーシアム（Hathi Trust）を組織して問題解決にあたり、プロジェクト非実施校へのデータ提供なども始めつつある。

蔵書がすべてインターネットを通じて読めるようになれば、学生が大学図書館に足を運ぶ頻度はおのずから減るだろう。極論ではあるが、何らかのネットワークに参画すれば、図書館を維持する必要すら希薄になる。事実、北米の小規模大学では、新たな蔵書を購入しないところも現れている。そこで、場所としての図書館の意義、あるいは図書館のサービスのあり方が見直されるのは必然であり、ラーニング・コモンズはその一つの解になりうる。

図1　大学図書館の資料費推移



（文部科学省「学術情報基盤実態調査」より作成）
文部科学省ホームページ
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/jouhoukiban/1266792.htm
（2013年11月30日アクセス）

三　慶應義塾メディアセンターの実証実験

より直接的な事例としては、デジタル環境の積極的な提供がある。前述のグーグルプロジェクトに国内で唯一参加している慶應義塾大学は、二〇一〇年度から三年にわたって電子書籍の利用実験を行った。これは、同大学メディアセンターが、複数の学術出版社及び大日本印刷、京セラコミュニケーションズなどの企業と共同で実施したもので、出版社から提供された書籍をiPadで利用できる仕組みをつくり、学生モニターの反応を調査した。結果はおおむね良好で、インターフェイスへの注文とともに、PCでレポートを書くときに使いたい、通学途中にスマートフォンで読みたいなど、デバイスへの要望も挙げられている。

二〇一四年度からは、実現化に向けて他大学の参加を呼びかけているが、この実験のもう一つのポイントは、図書館システムと同時に、学術出版社の新たなビジネスモデルを確立することにある。日本では国立国会図書館が特別予算を計上して、一九六八年までに発行された書籍の電子化を終えている。同館では、公共図書館や大学図書館への配信を可能にするための法改正も行っており、著作権や利用料などの問題が解決すれば、出版社があらためて電子化する必要はない。

しかしながら、大学側で需要のある一九七〇年代以降の既刊書についてはめどが立っておらず、出版社に負担を強いらざるを得ない状況がある。

前述のように、欧米の出版社がコングロマリットの傘下にあるのと異なり、日本の出版社のほとんどが独立した中小企業体であり、その多くは大学教科書を主な収入源としてきた。ところが、少子化に加えて講義スタイルの変化で教科書の利用が減り、単価の高い研究書も明るい材料をもち得ない。そうした中で、デジタル化はビジネスチャンスでもあるが、少なくない投資から、確実な収益を得ることが必須となる。そのオリジナルの供給モデルが、大学図書館という流通基盤を通して模索されている。

四　東京大学新図書館計画の目指すもの

東京大学の新図書館計画（アカデミックコモンズ）は、場所としての図書館と、デジタル環境整備の両方を組み合わせたプロジェクトである。計画の概要は、本郷キャンパスにある総合図書館の正面地下に自動化書庫を建設し、地上に最も近い部分にライブラリープラザと仮称する高次のラーニング・コモンズを設置、本館も改修してアジア研究図書館などの新たな拠点を設けるというものだ。デジタルプロジェクトとして目されているのは、新たな教育研究のデザイン開発である。

同大学ではすでに、知の構造化センター、大学院情報学環などによる知識の可視化ツールの開発・教育実験に着手してきた。二〇一四年度からは、大学院生を対象とした全学横断プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」を開講、人文学、デジタルアーカイブ、図書館情報学、情報記号論などを組み合わせた文理融合型の教育を開始している。新図書館計画でも、ソーシャルリーディング的なシステムの開発が見込

まれている。

こうした取り組みの根底には、書物の環境だけでなく、学生自身がデジタルネイティブになることへの、書物による知識の積み重ねという方法で成立してきた学問、とりわけ人文学の危機感がある。事実、二〇一四年は一九九五年――ウインドウズ95が発売になり、インターネットが一般に普及し始めた年――生まれの学生が入学する。ものごころついたときに、すでにグーグルが存在した世代に対しては、膨大な情報を文脈化し、再構成するデジタルリテラシー教育と、それを可能にする体系が求められる。

五　千葉大学アカデミック・リンクプロジェクト

他方、知識基盤としての図書館と教育との接合を基礎レベルで確立しようとしているのが、千葉大学のアカデミック・リンクである。アカデミック・リンクの最大の特徴は、図書館員、教員、学生の三者が各々の役割をもって参画できる要素が人的・物理的に用意されている点にあろう。

例えば、授業で示される参考文献を図書館が用意するシステムはどの大学にもあるが、図書館は指定図書を〝請け負う〟にとどまり、両者は分断されている。これでは、学生がほかの関連文献を合わせて借りたいと思っても、その文献が指定された意図を知らされていない図書館員には、最適なレファレンスができない。アカデミック・リンクでは、教員と図書館員が協力して授業用の参考文献リストを体系的に作成し、こうした需要を促すようになっている。

図書館における授業ツールの作成は、当然ながら教材支援とも関わってくる。前述のとおり今日の授業では、教科書を指定するかわりに教員がそのつどスライドやレジュメ、音声・動画などの教材を作成する例が多い。スキャナーや録音機器を備えたラボなどを設置する大学も増えているが、アカデミック・リンクでは、作成されたものの保存・公開も重視している。すでにある機関リポジトリ、オープン・コース・ウエアの延長ではあるが、図版などの権利処理に関わる支援を射程に入れている点が着目される。

六　おわりに

二〇一一年の五月、イリノイ大学とシカゴ大学の図書館を訪問する機会を得た。いずれも図書館情報学に力を入れ、デジタル化の先進校として実績が知られている。だがそこで強く印象に残ったのは、メインライブラリーのグランドフロアに集まる学生たちの、静かな活気あふれる様子だった。ノートパソコンを自由に広げて作業をし、友人と待ち合わせたり、書庫やラーニングスペースに移動したり、思い思いの行動で図書館を使いこなす学生を見ていると、学問が創造的な作業であることにあらためて思い当たる。

デジタルをリアルと対比させるのではなく、等しく創造的なものとしてデザインすることが求められている。図書館は、大学の中でそれにもっともふさわしい「場所」であり、共通の外部リソースをうまく使いながら、各大学の創造性を発揮する機構として位置づけていくべきだろう。

●特集 変わる大学図書館と学修支援の広がり

大学図書館のモデルケースを目指して

勝又 美智雄●国際教養大学国際教養学部教授・図書館長

一 はじめに

秋田市郊外にある公立大学法人国際教養大学（Akita International University：AIU）は二〇〇四年の開学以来、「図書館は二四時間三六五日オープン」を実施している。欧米の大学ではそれほど珍しくはない運営方式だが、日本では他に例がない。「図書館は大学の知的なシンボルであり、学生がいつでも自由に使えることが大前提でなければならない」という創立者、故中嶋嶺雄学長の強い思いで実現させたものだ。私は新聞記者だったが、開学まで「新国際系大学設立準備委員会」委員として丸二年間、永年の恩師である中嶋学長の補佐役として本学の中身づくりに深く関与し、開学と同時に図書館長に就任し、今日までずっと図書館の管理運営を陣頭指揮してきた。

本学の建学理念は「国際的に活躍できる優れた人材を育てる」ことにある。そのための基本方針として「全国に例のない新構想大学として秋田に理想的な大学をつくる。それにはすべての教育カリキュラムと設備、図書館を機動的に連動させ、教職員が対等の立場で車の両輪となって運営していく」ことを大原則にしている。

二〇〇八年春には、開学当初からの念願だった新しい建物ができた。それが地元の秋田杉を取り入れた斬新なデザインの木造・鉄筋コンクリート造の合成型で、国内の公共建築物デザイン賞を二つ、国際建築デザイン賞を一つ受賞するなどで話題を呼んだ。

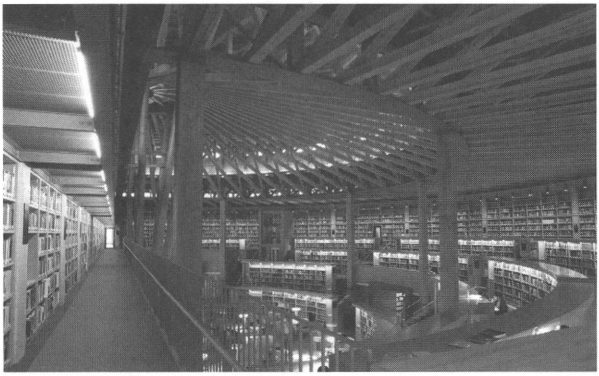
本学には現在、ほぼ毎週一〇～二〇組の視察団、見学者グループが来訪しているが、訪問者たちが一様に感心・感嘆しているのが図書館だ。「私が若いときにこんな図書館が欲しかった」「今から学生に戻って、こんなすばらしい環境で勉強したい」などという感想をたくさんいただいている。それは大変ありがたいことではあるが、私たちはそれには満足していない。むしろ、もっと学生にも、教職員にも、地域の市

民にも広く喜ばれ、愛されるにはどう改善すべきかをつねに考え、試行錯誤を続けていくことを覚悟している。

二　AIU図書館の現状

そこでまず、AIU図書館の現状から紹介したい。在学生は二〇一三年秋現在、全学で約八七〇人という小さな単科大学であり、一年生は全寮制で、二年生以降もキャンパス内の寮、アパートで生活することを希望する学生が多い結果、全学生の八五％がキャンパス内に住んでいて、事実上の全寮制になっている。また一年間の留学が義務づけられているので、毎年約一八〇人が海外の提携大学に留学し、逆にそうした提携校からほぼ同数の留学生が来ているので、キャンパス内はつねに日本人学生三人に留学生が一人、という割合になっている（なお、この提携大学は開学時にわずか二大学だったが、現在は四〇カ国一五九大学に上る。地域的にはアジア、欧州、アメリカがそれぞれ三分の一ずつで、留学効果を高めるために特定大学に数人以上送ることはせず、一校に一、二人を原則にしている。この提携校の多さも日本の大学としては他に例がないと思う）。

秋田杉の香りのする吹き抜けのAIU図書館ホール



いずれにしても、教職員合わせてもキャンパスにいるのは一〇〇〇人規模という小さな大学である。だから図書館も決して大きくはない。延べ床面積約四〇〇〇平方メートル、半径二二メートルの半円形のコロセウムで、天井の高さ一二メートルの吹き抜けのホールを中心に、書籍棚、読書机が階段状になっている。建物を支える柱と天井の傘状の梁はすべて秋田杉で、吹き抜けの高い天井は落ち着きと開放感があり、四方に大きく作られた窓からは外の杉林、キャンパスの芝生から隣の県立スポーツ公園の桜並木、森林まで遠望できる。

設計は、環境デザインの第一人者である仙田満東京工業大学名誉教授（元日本建築家協会会長）のオフィス。仙田氏が「利用者がワクワクするようなときめき感と、長時間座って作業するときの落ち着き、居心地の良さを感じられるように配慮した」と語るとおり、快適な空間となっている。

図書館の利用人数は昨年度二四万五〇〇〇人、一日平均二〇〇～三〇〇人で、午前〇～八時の間では学期末で三〇〇人以上、夏冬の休み中で一〇〇人強、年間平均で二〇〇人となっている。つまり全学生の二、三割が深夜まで図書館で勉強している。私自身、図書館一階入り口の館長室で深夜まで仕

事をすることが多いが、実際に連日午前一時、二時でも数十人が出入りしており、夜は早く寝て明け方から図書館で勉強する者も少なくない。

蔵書数は現在、図書が七万冊（洋書が四万六〇〇〇冊、和書が二万四〇〇〇冊）。雑誌は一八二種で、うち洋雑誌が一〇六種、和雑誌が七六種。CD、DVDなどの視聴覚資料が三〇〇〇点、オンライン・データベースが一一種、新聞が一一種ある。いずれも大学図書館としては決して豊富ではないが、本学の建学理念である「国際教養」を身につけるのにふさわしい書籍、資料類を重点的にそろえ、特に洋書、洋雑誌の数は今でも他の数千人規模の大学に勝るとも劣らないと自負している。

AIU図書館では、多くの学生が読みたがる一般的な文芸書の類については秋田市内の県立図書館（七五万冊所蔵）との相互貸出システム（ILL）協定で、週三回の巡回サービス便で簡単に借りられるようにしている。また、教員が研究上必要とする学術情報も、学術雑誌、学会誌類はどんどんデータベース化されている。そこで図書館として、どうしても所蔵しておかなければならない図書、雑誌類は何かをつねに洗い直している。毎月の書籍購入では入念に審査し、雑誌は毎年、データベースは二年ごとに見直し、利用者の少ない雑誌、検索数の少ないデータベースは契約を打ち切り、要望の高い雑誌、データベースに切り替えている。これまで購入予算の中で年々データベースの占める割合が増え、現在では書籍・雑誌費が五〇％、データベース契約費が五〇％となっている。

三　教育カリキュラムとの連動と学修支援

AIU図書館の運営は大学のカリキュラムと密接に連動している。まず、入学生に対するオリエンテーション期間中に図書館職員が図書館の特徴と利用法についてガイダンスし、さらに大学の入門講座（週一回、全一五回必修で一単位）でも図書館での資料調査、データベースの検索法などについて私が講義している。

新入生は全員、英語集中コース（English for Academic Purposes；EAP）を履修してReading, Writing, Speaking, Presentationで規定以上の成績をとらなければ基盤教育コースに進級できない。そのEAPコースではReading, Writingなど毎日のように宿題があり、その課題教材（冊子類や視聴覚教材）は図書館のファカルティ・リザーブに置かれて二、三時間あるいは一日単位の短期貸し出しで応対している。特にHearing, Speakingに関しては、図書館二階に併設した言語異文化学習センター（Language Development and Intercultural Studies Center：LDIC）で自習できるようにしている。同センターにはPC、CDプレーヤー、言語学習ソフトが使える防音加工の個室が一、二人用一二室、六～八人用の多目的学習室が六室あり、英語だけでなく、学生が留学する先の言語として三五カ国語が学べるよう視聴覚教材を豊富にそろえている。

また基盤教育の中でも、「英作文」と「ライブラリー・リサーチ（図書館調査法）」が必修科目（三単位）であり、レポートを書く際の資料探しに図書館とインターネット・データベースの両方を使いこなせるよう、実習を繰り返しながら細かく指導している。

ＡＩＵでは全教室にＰＣ、スクリーンがあり、ほぼ全教員がインターネットやＤＶＤを使いながら授業をしている。私自身、北米研究科目（政治、経済、社会）では毎回、学生二、三人に宿題について五～一〇分のプレゼンテーションをさせ、それを学生たちに評価させながら議論する形で授業を進めている。そのプレゼンの材料も図書館が契約しているProQuest Central, JSTORE, LexisNexis Academicなどのデータベースで雑誌論文や新聞記事、政府機関の公文書類を検索して引用するように指導している。最近ではＣＮＮ、ＢＢＣニュースやC-SPANなどの記者会見、討論番組などをYouTubeで紹介して、それに対する自分の意見をレポートとして提出させる宿題も多い。こうして一・二年生は、各科目で数回のプレゼンと一〇〇〇～二〇〇〇語のレポート提出、三・四年生の専門科目ではプレゼン二、三回、レポート三回、計三〇〇〇～五〇〇〇語の提出が標準となっている。

このように本学の学生は各学期でかなりの量のプレゼンとレポート提出を求められており、その出来映えが成績に大きく響く。しかも全受講科目の総合評点平均値（ＧＰＡ）が二・五以上なければ留学を認められないので、学生たちも真剣に勉強せざるを得ない。それだけに図書館と図書館内のＰＣ室で毎日、早朝から深夜まで調べものやレポート作成に長時間かけている学生が多い。本学の学生の九割以上は自分のパソコンを持っているので、自分のＰＣを図書館に持参して、図書館の資料を前に広げながらレポート作成している。

また、プレゼンが苦手、レポートの書き方がわからない、という学生たちに対しては、図書館二階のＬＤＩＣに併設した「学修達成センター（Academic Support Center；ASC）」で上級生、大学院生、留学生たちが個別指導している。さらに今年度から新たに「アカデミック・キャリア支援センター（ＡＣＳＣ）」を設置して国内・国外の大学院への進学を勧め、ＧＲＥ、ＧＭＡなどの受験対策指導も始めた。こうして自学自習を促すＬＤＩＣ、学力アップを図るＡＳＣ、さらに高度人材の育成を促すＡＣＳＣの三センターを総称して「能動的学修支援センター（Active Learning Support Center）」と呼び、ここを「グローバル人材育成教育の拠点」と位置づけている。

またＡＩＵでは、全課程を通していろいろな課題についてのグループ研究を積極的に奨励しており、図書館内のグループ学習室（六人部屋三室、二時間単位の予約制）はつねに予約でいっぱいで、土日にまとめて長時間使う学生グループも多い。アメリカの大学図書館では、こうしたグループ学習を「ラーニング・コモンズ」と称して推奨しているが、本学では図書館内及びＬＤＩＣ内の多目的学習室をそれに充てているほか、毎日、終業後の教室も予約制で、ゼミなどのグル

ープ学習やサークル活動の場としてフルに利用するように促している。

四　地域貢献と生涯教育

少子高齢化が進む中で、大学の社会的な役割は「社会の要請に応えて適切な人材、職業人を育成する機関」に加えて、「小中高校まで含めた地域の教育の代表的な中核機関」「社会人の生涯教育（リカレント教育）のための場」へと大きく広がってきた。その中で大学の付属組織である図書館も、その性格が学生・教職員向けの勉強・研究の参考資料を提供するという第一義的な目的に加えて、地域貢献、生涯教育のためのサービス提供に努力しなければならなくなってきている。

その点を考慮して、ＡＩＵ図書館では一般市民の利用は平日が午前九時から午後一〇時まで、土日・祝日は午前一〇時から午後六時までとしている。図書館には英語の童話、絵本、漫画、おもしろ図鑑の類も数多くそろえており、平日の午後や土日には親子、家族連れで来る人たちが多い。

また書籍だけでなく、ハリウッド映画や歴史ドキュメンタリー、世界遺産、宇宙探検、さらには能狂言、歌舞伎、文楽、落語など日本の古典芸能を含む多彩なＤＶＤ作品、世界のクラシック音楽や邦楽などのＣＤも豊富にそろえている。これら視聴覚作品は教材として利用する一方、学生や市民が良質の芸術・娯楽作品に気軽に親しめるように配慮したものだ。

その波及効果とも言えそうなのが、ＡＩＵ図書館をよく使う社会人の中に「先生の授業を受けたい」と言ってくる人が出てきていることだ。地元の高校を退職した校長が「アメリカ経済を勉強し直したい」と特定科目の履修生となるケースもあれば、「娘世代と一緒になって勉強したい」と正規の学生として社会人入学してきた五〇代の主婦もいる。彼女は新年からのアメリカ留学も決まって今、張り切って準備している。そのきっかけが「愛する図書館」というのは、館長としてうれしいかぎりだ。

五　国連寄託図書館になっての長期展望

ＡＩＵ図書館は二〇一三年夏、国連の寄託図書館に認定された。日本では国立国会図書館、東京大学、東北大学、九州大学など規模の大きい旧帝国大学を中心に一四館の図書館が認定されていたが、この春、国連の寄託図書館政策の大転換があり、それに伴って一大学が脱退したため一三館に減り、本学の認定であらためて一四館となった。これはＡＩＵが五年前から申請していたもので、国連の政策転換後、世界で初の認定となった。

これまでの寄託図書館は、国連の発行する書籍・雑誌類を配布してもらい、それを収蔵し展示するということが主眼だった。だが国連は近年、刊行物を次々に電子データ化し、それが世界中のどこからでも自由に無料でアクセスでき、ダウンロードできる体制を整えており、今後、原則的に印刷物を発行せず、寄託図書館にも出版物を送らなくなるということ

が正式に決まった。このため世界中の寄託図書館の間では、寄託図書館であることのメリットがなくなるのに年会費一〇〇〇ドル（一〇万円）を収めるのは無意味だ、と脱退するところが出てきているという。

だが本学は、全くそうは考えない。むしろ国連の寄託図書館政策の転換は、世界の高度情報化社会（ＩＴ社会、グローバル社会）化が急速に進む中で、世界及び日本の将来の図書館像の転換を大きく促すものであり、今後、寄託図書館としての役割を先駆的に担っていくことによってＡＩＵの教育内容の改革と「グローバル人材の育成」教育に大きく寄与すると考えているからだ。

その理由はいくつもある。まず第一に、国連職員の指導・助言を受けながら膨大な国連情報を授業の中に取り入れることによって、秋田の田舎で人権、難民、環境保護、エネルギー政策、医療、教育、地域紛争予防など世界的な課題についてつねにビビッドな臨場感を養い、世界的な比較分析の訓練を積んでいくことが期待できる。第二に、図書館が単に刊行物を収蔵・展示する場所ではなく、情報データを縦横に検索し、取り出し、加工処理して政策判断に有益な材料をつくっていくという高度な情報処理・管理能力のある人材を育てる場所になっていくことが期待できる。第三に、図書館司書をはじめ教職員がさまざまな分野について専門知識と高いデータ検索能力を身につけ、データ検索に関する学生の相談、指導にも力を発揮できるような体制をつくっていくのに役立つ。第四に、本学の学生の三割は将来、国連などの国際機関、ＮＧＯなどで働きたいと希望しており、そうした学生たちの希望に応えるように学部レベル、大学院レベルで「国際公務員への道」コースを新設し、国連幹部職員による集中講義、特別講座などを開催しながら「国際機関で活躍できる人材」を育成していくことに役立つ。第五に、世界中の寄託図書館ネットワークを生かしてＡＩＵと世界の大学、研究機関との交流を進め、世界各地の大学が連携して人類共通の課題にどう取り組んでいくべきかを考えるきっかけにする。

――以上のようなことを想定して、早くから寄託図書館を目指してきたわけで、この十月には認定を記念して国連本部から幹部を招いて「国連フォーラム」を開催し、こうした長期展望の実現に向けての第一歩と位置づけた。

大学図書館は今、大きな転換期を迎えている。これまで述べてきたように、図書の収蔵・閲覧型の「静的な施設」から、学生たちが自分に必要な文書、データを素早く取り出し、行動の指針となる企画書類を作成するという「動的な作業部屋」へと変わりつつある。当然、それを補助する司書、教職員もアドバイザー、ファシリテーター役を担うことが期待されるようになるはずだ。それは、大学教育の授業風景が、教師が壇上から一方通行で講義する場から、学生がプレゼンしてお互いに議論し合う場に変わり始め、教師の役割が講義者からアドバイザー、ファシリテーターになりつつあることと軌を一にしていると私は考えている。

マイライフ・マイライブラリーの今

――東京女子大学図書館における学習支援の現状と今後の展開

滝口　太郎●東京女子大学現代教養学部教授・図書館長

一　はじめに

東京女子大学図書館のマイライフ・マイライブラリーが、二〇〇七年度に文部科学省の「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援ＧＰ）」に選定され、その取り組みを開始してから六年が経過した。すでに取り組み開始前の図書館を知る学生はほとんどいない。在学生にとってマイライフ・マイライブラリーは入学前から存在し、日常生活の一部と化しているのである。

マイライフ・マイライブラリーの概要については、本誌二〇一〇年一月号で紹介する機会を得ている。概要に特に大きな変更はないため、本稿では主としてその後の変化や課題について言及するとともに、今後を展望してみたい。

二　取り組み目標の確認

マイライフ・マイライブラリーの企画立案の背景とその目的は、学生の図書館利用の漸減傾向を憂慮し、図書館内で学生のニーズに合わせたハード／ソフト両面における新たな取り組みを行い、学生の「図書館に滞在し、資料を活用した主体的な学び」を支援することを目指したものである。すでに企画段階から図書館内での学習支援を目指していたと言える。ハード面では、館内の一階にグループ学習や飲食のできるスペースを設け、レポート作成などに利用できるＰＣが整備された。ソフト面では、学生アシスタントによるピアサポートを行う学生協働サポート体制が稼動している。

なお、本学ではマイライフ・マイライブラリーをラーニング・コモンズとうたったことはないが、その実態はラーニング・コモンズと認識される場合が多い。

近年、アクティブ・ラーニングの重要性が叫ばれ、多くの大学でアクティブ・ラーニングの場としてラーニング・コモンズが設置されている。アクティブ・ラーニングの視点から言えば図書館内での設置は必須ではなく、特に大規模な大学においては、図書館以外の建物にラーニング・コモンズを設置するところも少なくない。それによる利点も多いのであろう。しかしながら、本学の場合はそのスタート時の目的からも明白なように、あくまでも図書館で展開される取り組みで

あり、図書館を学生の大学生活での一つの拠点とすることを目指すものである。言い換えれば、大学の正課教育を図書館が側面から支援するものとしての位置づけとなっている。

三　文部科学省の補助事業から大学経常事業への移行

東京女子大学ではGP事業に応募する際、経費面も含めて大学として継続できる事業であることを確認してきた。マイライフ・マイライブラリーについても同様に応募し、選定後には事業を全面実施するために必要な館内改修を大学経費で行った。このような経緯があるため、事業の初期から補助金終了後の予算措置を視野に入れて実施し、補助期間終了後の二〇一一年度以降は大学の経常事業として継続実施し、さらなる充実発展を図っている。

四　学生の図書館利用形態などの変化

マイライフ・マイライブラリーの取り組みによって、図書館利用者は五割程度増加した。一方で、館外貸出冊数の増加はあまり見られない。取り組み前のデータがないので確定的なことは言えないが、館内利用が増加していると思われ、学生が本を借り出して自宅やPCのある情報処理教室などで学習するスタイルから、館内に滞在して、図書館資料を利用しながら課題やレポート・論文作成に取り組み、プリントアウトして完成させるスタイルに変化している。「学習滞在型図書館」が実現していると言えよう。

また、「本や図書館が好き」という学生が一定数おり、取り組み開始直後の学生協働サポート体制を支える役割を果たしてきたが、学生アシスタントの満足度が高く、それが主に口コミで広まることにより学生アシスタントの応募者が増え、図書館での活動に参加する学生が大幅に増加している。このことは学生アシスタントの活動の活性化という効果だけではなく、アシスタント経験者の学生が多くなることにより、図書館の利用方法に精通して図書館（資料）を上手に利用できる学生を増加させるというれしい効果も生んでいる。

五　学生協働サポート体制

学生協働サポート体制は学生アシスタントを活用して学習支援を行うもので、学生アシスタント自身も「支援される立場」から「支援する立場」に変わることによってその社会的成長を図ることを目指している。社会的成長の先にあるものはキャリア構築力の育成であり、その意味でも、当初からマイライフ・マイライブラリーの学生アシスタントには有償のアルバイトと無償のボランティアという二つの形態がある。それぞれの形態で特徴・意義が異なり、学生アシスタントの中には、両方の活動を同時にする学生も少なくない。

有償のアルバイトには、サポーター、システム・サポーター、学習コンシェルジェがある。キャリア構築力の育成のためには、雇用されて業務に就くという形態でキャリア経験を積むことも大事な要素と言える。

無償の学生アシスタントであるボランティア・スタッフは、自身の都合の良いときに活動すればよいこととなっている。

学生アシスタントの応募・採用状況

		応募	採用
2008年度	前期	62	51
	後期	65	57
2009年度	前期	64	56
	後期	56	56
2010年度	前期	96	71
	後期	99	71
2011年度	前期	127	80
	後期	106	84
2012年度	前期	145	82
	後期	89	84
2013年度	前期	149	87
	後期	132	98

注 数字は延べ合計人数

自分の意志で自発的に活動することは、それだけで一歩前に進んだことになり、その意義は大きいと思われる。

前述したように、学生アシスタントは満足度が高く応募が多い。特にサポーターの応募は倍率が高い。取り組み開始から二〇一三年度までの応募・採用状況は**表**のとおりとなっている。毎学期多くの学生アシスタントが活動し、日々の活動をメーリングリストで報告し合い、情報交換と交流を行っている。また、毎学期全学生アシスタントが交流する機会として全体ミーティングと業務別のミーティングを設けている。

これらの交流の機会において、学生アシスタントから寄せられる意見はさまざまであるが、各業務において特徴的なものも多い。①返本作業をしながら利用者支援を行うサポーターの場合は、いろいろな本に出会える喜びやその本を利用した利用者から刺激を受けた体験など、②館内PC利用者のサポートをするシステム・サポーターの場合は、自分自身のスキルアップも図ることができた実感や利用者にわかりやすく説明することを通じてコミュニケーション能力が向上したことなど、③ボランティア・スタッフは図書館の使い方・マナーを学ぶことができたことや図書館が快適な場所になっていることに貢献できている達成感などが語られる。④学習コンシェルジェは大学院生であって、学部生の学習を支援する活動を行っている。現在の学習コンシェルジェは、自身が学部時代に学習コンシェルジェに支援された経験や他の学生アシスタントとして活動した経験をもつ場合が多い。このため、立場が変わって自身も学部生の学習を支援できる喜びや支援を通じて視野が広がり、自身の研究活動の充実や資料検索のスキルアップが図られた体験などが語られる。

学生アシスタントの全体ミーティング

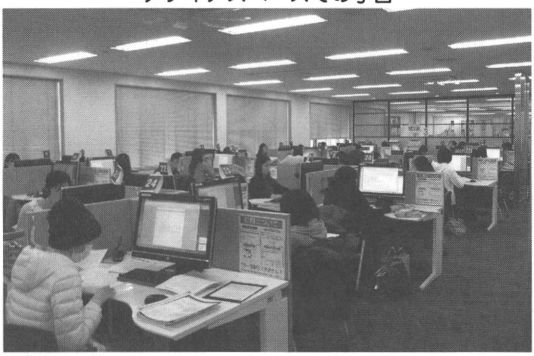
このように学生アシスタントの活動はそれぞれの学生の成長にとって有益と思われるが、全学生が学生アシスタントを経験することは難しい。また同時に、学内の学生生活・活動の拠点は図書館だけではない。しかしながら、拠点の選択肢の一つとしてマイライフ・マイライブラリーが存在し、特に図書館が正課外学習を支援する環境を提供していることの意

義は学生にとって大きいと言えよう。

六　自己点検・評価／外部評価の実施と評価結果に基づく改善の実施

GP事業期間の最終年度にあたる二〇一〇年度にマイライフ・マイライブラリーの「自己点検・評価」が行われ、その結果に基づいて「外部評価」を受けた。さらに同年度末には、外部評価委員長を務められた筑波大学の逸村裕教授を講師に招き、公開実績報告会を開催した。これらの詳細については本学ホームページで公開している。

メディアスペースでの学習



評価においてハード面で指摘されたことの一つに、PC環境の改善の必要性がある。「外部評価報告書」では、メディアスペースの混雑解消のための方策が必要との指摘がなされた。これを受けて図書館では、日々の利用状況を注視しつつ方策を検討し、二〇一三年夏の更新時にいくつかの対応を行った。台数については、年々持ち込みPCの利用者が増加している状況から基本的には増減なしとしたが、印刷専用のデスクトップPCを二台増設し、持ち込みPC利用者が印刷だけのためにPCを利用する状況の解消を図った。これにより持ち込みPC利用者の利便性が高まるとともに、メディアスペースの混雑緩和にもつながるものと期待している。

ソフト面では、初年次学習支援に関する今後の方策として、「自己点検・評価報告書」で図書館のガイダンスを一年次必修科目で活用することについて言及された。これを受けて学部長を中心として検討が行われ、情報検索ガイダンスの一年次受講の必須化、及びその後には三年次での受講の必須化を進めていくことが示された。具体化にあたっては図書館が検討を行い、二〇一三年度から全一年次学生及び新入の編入生を対象に正課外で実施することとなり、四月末から五月上旬にかけて実施した。受講率は約九七％で、受講後にはeラーニングシステムを利用して、ガイダンス内容の理解を深めるための「確認テスト」も受講させた。

七　結び

これまでマイライフ・マイライブラリーの過去六年間を振り返ってきた。すでに周知・広報の段階は過ぎ、次の段階へ進んでいる。前項で多少触れたように、マイライフ・マイライブラリーでは、さらなる活用・充実に向けた取り組みを始めている。学習滞在型図書館となった今、課題は主として正課教育との連携強化にあり、その向かう先には「学修支援」機能の強化が見えているのである。

●特集 変わる大学図書館と学修支援の広がり

主体的な学修を支える図書館を目指して

――立教大学池袋図書館の試み

豊田 由貴夫●立教大学観光学部教授・図書館長

一 はじめに

二〇一二年十一月、立教大学池袋キャンパスに新図書館（池袋図書館）が開館し、一年以上が経過した。近年の図書館利用の傾向を踏まえて設立された図書館であるが、この間、多くの学生・研究者に利用されてきた。この間の利用状況を踏まえ、新図書館の試みを紹介したい。なお、図書の収蔵に関しては、電動集密書架、自動書庫などの最新設備も新図書館の特徴として挙げられるのだが、今回は主として学修支援との関連で池袋図書館の取り組みを紹介したい。

二 立教大学池袋図書館設立の経緯

立教大学池袋キャンパスには、二〇一二年まで四つの図書館が存在していた。図書館本館、人文科学系図書館、社会科学系図書館、自然科学系図書館である。決して広くないキャンパスに図書館の資料と機能が四つの組織に分かれていたのは、さまざまな経緯があってのことだが、利用者にとっては必ずしも便利な状況ではなかった。利用者はしばしば複数の図書館を訪れなければならず、また教育・研究が学際化していき、複数分野の資料・情報を扱う必要性が増大していく傾向を考えるならば、図書館の資料

立教大学池袋図書館エントランス

と機能を統合することは必然的な帰着であった。このため立教大学では数年前からこれら四つの図書館の資料・機能を一つの図書館に統合する計画を進めてきた。新図書館設立のための準備委員会が設置され、多くの会議が続けられた。そしてようやく、二〇一二年十一月に立教大学池袋図書館として開館することができた。

延べ床面積一万九〇〇〇平方メートル、閲覧席数一五二〇席、収納可能冊数二〇〇万冊、貸し出しも含めたパソコンは六〇〇台が設置され、都内の私立大学の図書館としては有数の規模をもつ図書館が完成した。

三　池袋図書館のコンセプト

新図書館の開館にあたっては、「本気で学べる図書館を目指して」をスローガンに、周到な計画が練られた。そのために二〇〇八年に新図書館設立に関わる教職員をアメリカに派遣し、先進的な試みを行っている大学図書館を見学し、新しい図書館のコンセプトを作成する際の参考にした（詳細は小圷二〇〇九年を参照）。

開館に際して考えられたコンセプトは、主として以下の四項目である。

(1)　**滞在型の図書館**――単に資料の貸出・利用だけでなく、長時間滞在することを可能にする図書館を目指した。

(2)　**バリアフリーの図書館**――誰もが使いやすい図書館を目指した。

(3)　**グループワークの図書館**――図書館の利用は、従来は個人によるものが一般的であったが、近年、複数のメンバーによる議論や共同作業が重要視されるようになってきた。新図書館もこれに対応することを目指した。

(4)　**学修支援の図書館**――従来のレファレンスサービスをさらに進め、学生の情報リテラシー獲得支援を目指した。

四　池袋図書館の特色

四つのコンセプトのそれぞれを、どのように実現しているか、以下簡単に説明しておく。

(一)　滞在型の図書館

まず、滞在型の図書館を実現するために、開館時間は授業開始前から、夜間大学院終了後までの長時間の利用が可能になっている。

開館日数も、年末年始、入試期間、お盆などを除き、年間約三三〇日と、

池袋図書館開館時間・開館日数

平日	8:45～22:30	開館日数 327日 （2013年度）
土曜	8:45～20:00	
日曜	10:00～17:00	
試験期平日	8:30～22:30	
試験期日曜	10:00～19:00	

できるだけ多くするよう努力した。

また、学生生活の中心が図書館となるよう、いくつかの工夫を取り入れた。

(1) ふた付き飲料の持ち込み許可

従来から、震災後の節電時より図書館内の飲料摂取については緩和策をとってきたが、これをふた付きの飲料に限って正式に持ち込みを許可した。「資料を汚す恐れがある」という反対も根強くあり、決定に際しては長時間の議論が続いたが、利用者の長時間滞在を考慮して、正式の許可とした。飲料によって資料が汚れるなどの問題は、これまでのところ特に報告はされていない。

(2) 軽食の許可

軽食をとれるスペースを用意し、持参した弁当、軽食などをとれるようにした。テラスとリフレッシュルームの二つのタイプのスペースを用意し、リフレッシュルームには飲料やパンの自動販売機も置いてある。

(3) 携帯電話通話の許可

長時間の滞在を前提にすると、電話への対応を考慮しなければならない。就職活動をしている学生の中には、企業などからの電話に至急対応する必要がある者もいる。このような状況に対して、一部のスペースで携帯電話での通話を許可し、そこに移動すれば通話ができるように配慮している。

(4) モバイル機器充電の許可

これまで、持参したパソコンの充電は許可していたが、携帯電話やスマートフォンなどモバイル機器の充電は認めていなかった。しかし、図書の検索もスマートフォンで行われることが多くなり、モバイル機器も図書館利用のための情報機器であるとの考え方から、閲覧席でのモバイル機器の充電を許可している。

このほかにも、隣の座席との仕切りのあるなしなど、いくつか異なるタイプの閲覧席を用意し、利用者のスタイルによってそれらを選べるようにも工夫している。

(二) バリアフリーの図書館

・誰もが使いやすい図書館を目指し、主要動線をすべて自動ドア化・フラット化した。これにより、図書館内は車椅子で自由に移動ができる。またすべての閲覧フロアに多目的トイレ（一階はオストメイト対応）及び電動昇降机を設置した。また、車椅子利用者がエレベータを使いやすいように、通常は壁面にある昇降ボタンをドア手前の独立した柱に設置した。これにより、車椅子から体を傾けることなくボタンを押すことができる。

(三) グループワークへの対応

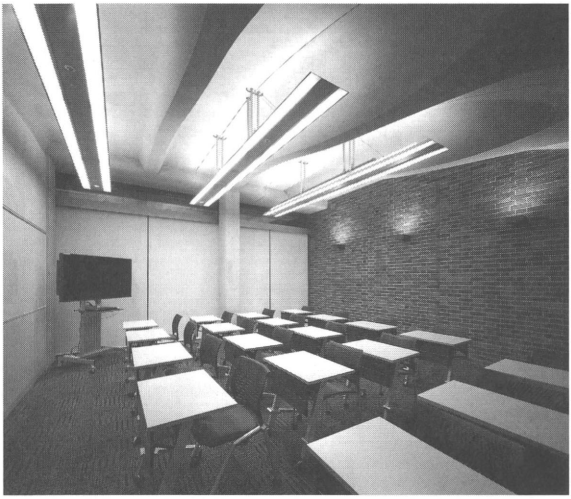
近年の教育・研究活動では議論や共同作業が重要視されるようになっているが、池袋図書館もこれに対応して、これら

の作業ができるスペースを図書館内に設置した。グループ学習室とラーニング・スクウェアである。

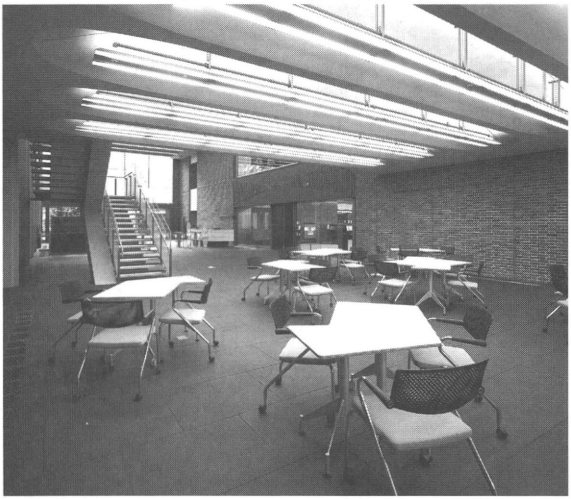
グループ学習室は図書館二階に大小八室を設置した。一九人用が二室、一二人用が六室である。パソコン用のディスプレイが設置されており、予約して使うのが基本である。

エントランス奥にはラーニング・スクウェアのスペースを設置した。一階に五四席、二階に四二席を用意し、移動・組み合わせができるキャスター付きの椅子と移動可能な机を配置している。こちらは特に予約する必要はなく、利用者は自由に議論や共同作業ができる。議論・共同作業のために、キャスター付きのホワイトボードを配置してある。また、パソコン貸し出し用のカウンターがそばにあり、床仕込みの電源が利用できるように、延長コードの設置ボックスも配備している。

グループ学習室



ラーニング・スクウェア



㈣ 学修支援

図書館の事業目標の一つとして、学生の情報リテラシー獲得支援を挙げている。このために、現在、三つのタイプの支援を行っている。図書館職員によるレファレンス、大学院生によるライティングヘルプであるラーニングアドバイザー制度、学部生によるコンピュータヘルプである。

ラーニングアドバイザー制度とは、図書館の資料利用の相談からさらに進んで、レポート作成などに関するアドバイスを行うものである。博士後期課程の学生に図書館内のデスクに座ってもらい、レポート・論文作成に関わるテー

マ設定、文献の探し方、レポートの書き方などに関するアドバイスを行っている。

コンピュータヘルプはパソコンの利用に関してアドバイスを行うもので、学部生にパソコンヘルプデスクに座ってもらい、パソコン利用に関わる質問・相談に答えるものである。

グループワークの中心となる場である二階にこれらの三つの窓口を集中して設置し、学生は基本的にこれらのサービスをワンストップで受けられるようにしてある。

このほか、図書館内に設置した講習会室を利用して、情報検索の講習会を適時開催している。学部からの依頼により、授業の一コマを図書館の利用のための講習として行ったり、また図書館独自の講習会を開催するなどして、学生の情報リテラシー獲得の支援に努めている。

五　開館後の利用状況

開館後一年以上が経過したので、利用状況をまとめてみたい。利用者数は、それまでに分かれていた四館の合計入場者数と比べて約二〇％アップしている。学部生の一人あたり年間貸出冊数も、前年度に比較して約一七％アップしている。一日の利用者数は多いときで一万人を超える日が出ており、これは池袋キャンパスの学生数が約一万五〇〇〇人であることを考えると、平均で約三分の二の学生が利用していることになり、その利用率が非常に高いことがわかる。特に目立っているのはグループ学習室の利用頻度であり、平日の午後はほぼ予約で満室という状況が続いている。ラーニング・スクウェアも常時、利用者で満席に近い状況が続いており、総じて予想よりもグループ学習者の利用率が高いと認識している。

開館後、約一〇カ月で利用者数は一〇〇万人を突破した。これは立教大学の学生規模を考えると、かなり多くの利用者数だと考えている。土曜・日曜や長期休暇中の利用も一定数存在している。

開館後、さまざまな図書館関係者からの見学が続いているが、見学をした方々からは一様に好意的な印象が述べられている。自動書庫などの設備に対する称賛も多かったが、大学関係者からのコメントで印象に残っているものでは、「施設のすばらしさもさることながら、多くの学生が図書館で熱心に学習している姿に感心する。自分の大学でもこのような施設が欲しいが、もっと欲しいのはこのように熱心に勉強する学生だ」という声があった。

六　他大学図書館との連携

立教大学は、ＪＲ山手線沿線に位置する他の七大学と「山

手線沿線私立大学図書館コンソーシアム」の協定を結んでいる。このコンソーシアムに参加している大学は立教大学のほかに、青山学院大学、学習院大学、國學院大学、東洋大学、法政大学、明治大学、明治学院大学である。それぞれの大学が所蔵している図書・資料を互いに利用し合い利便性を図ろうというもので、そのために蔵書検索データベース（OPAC）を相互乗り入れしている。これにより、コンソーシアム加盟大学図書館の蔵書を同時に検索できるようになっている。

現在、教育・研究のすべてのニーズに一大学の図書館で対応することは無理があり、そのためには他の大学図書館との連携は欠かせない。この制度による利用件数は、二〇一二年度では、立教大学から他の大学の利用件数が二五八六件、他大学から立教大学の利用件数が一二一八件となっている。

このほかに他大学との相互協力は、文献複写、資料貸借、紹介状の作成などの形で行っている。

七　今後の課題

グループ学習のスペースが不足していることは明らかであり、図書館以外に大学全体としてグループ学習のスペースを設置するよう対応をしている。旧図書館本館をそのような施設として改修している最中である。

学修支援のさらなる充実のためには、学部・研究科との協力が必要であると考えている。そのため、学部・研究科のニーズを把握し、それに対応した学修支援のため、学部・研究科との協力関係の構築を模索している最中である。

新図書館の開館に伴ってその利用が大幅に増大したことから、学習環境を適切に整えれば、その利用が増大することをあらためて認識させられた。利用の増大は、もちろん図書館が利用者からのさまざまな要望に応えてきた結果であるが、同時にまた図書館側から提案してきたことの結果でもある。そして図書館が新しい場や機会を提供することで、提供側の予想もしなかった新しい利用法が出てくることも期待できる。今後の図書館の役割として、利用者からのニーズへ対応するだけでなく、図書館から新しい利用法の提案をすることがますます重要になってくるであろう。

●参考文献

・小圷　守「情報リテラシーとラーニング・コモンズ：日米大学図書館における学習支援」『情報の科学と技術』（特集：情報リテラシー）、二〇〇九年、五九巻七号、328～333ページ
・小圷　守「新館紹介：立教大学池袋図書館」『大学図書館研究』二〇一三年、九八号、75～84ページ写真

写真：（有）米倉写真事務所

●特集 変わる大学図書館と学修支援の広がり

多様な学修スタイルへの対応を目指して

寺西 浩●成蹊大学図書館事務室事務長

成蹊大学情報図書館は、成蹊学園創立一〇〇周年記念事業の一環として、二〇〇六年九月にオープンした。設計は、成蹊高等学校卒業生の建築家坂茂（ばんしげる）氏と株式会社三菱地所設計が担当した。坂茂氏は世界的に活躍する建築家であり、最近では、二〇一一年の地震で被災したニュージーランドのクライストチャーチ大聖堂の仮設教会を設計している。本学情報図書館の斬新なデザインを担当し、成蹊学園再開発のコンセプトである「明るく、美しく、温かい」建物及び館内空間を見事に実現している。

一 情報図書館設計のコンセプト

二〇〇二年、新図書館建築をどのような施設にするかを検討するために「大学情報図書館新設準備室委員会」が設置された。この委員会の中で、以下のような構想が出されている。

・蔵書収容数の拡大、情報化への対応
・学生が利用しやすい図書館として、個人利用だけではなく、グループ利用ができるスペースを設置
・これまでにない新しい機能をもった図書館

委員会での検討を経て、最終的な「情報図書館」の提案に至っているが、坂茂氏が語っていた設計の意図の中に、「たくさんの学生に使ってもらう、学生が集まれる場所」「館内を目的別に空間を分ける（話し合い、個人利用、資料保存）」という考えが含まれており、これまでにない特徴的なデザインと多様な学修スタイルに対応する図書館の建築につながっている。

二 多様な学修スタイルに対応する施設・設備の特徴

設計のコンセプトを実現するために、館内は会話ができるレベルに段階を設け、エリアごとにゾーニングを行っている（**表1**）。入り口付近に設置されたリフレッシュエリアから、館内を奥に進むにつれて、段階的に静粛な空間に移行していくように設計されている。各エリアとその特徴について説明する。

(1) リフレッシュエリア

一階の入館ゲートに入る前のエントランスに配置された、館内で唯一の飲食が可能なエリアであり、飲み物の自動販売機が設置されている。学習の合間に友人や教員とゆったりと

表1　情報図書館内の会話、通話、飲食のエリア別ゾーニング

エリア	会話	通話	飲食
クリスタルキャレル	×	× マナーモード	×
開架書架	×	× マナーモード	×
アトリウム	△ 小声での学習会話	× マナーモード	×
プラネット	○ 学習会話	× マナーモード	×
エントランス	○ 学習会話	× マナーモード	×
リフレッシュエリア	○	○	○

交流することができる空間となっており、館内で最も活気のあるエリアとなっている。

(2)　アトリウム

情報図書館の中央部分を一階から五階まで吹き抜けとしたガラス張りの空間であり、図書館とは思えない開放的な閲覧・学習スペースとなっている。小声での会話を認めており、貸出ノートパソコンなどを活用したグループ学習などに有効利用されている。貸出用ノートパソコンは無線LANに対応しており、現在二四台用意しているが、連日ほぼフル稼働の状態となっている。スマートフォンやタブレットPCが個人へ急速に普及を始めているが、図書館内ではキーボードつきのパソコンの需要がまだまだ多い状況であり、これら情報機器については、まさに現在は過渡期と言える。

アトリウム内では、複数の学生が集まって、議論を行いながらの共同学習をしたり、レポート作成の情報交換やゼミの発表を準備するといった、会話ができるメリットを生かした、自由な利用の仕方がされている。

(3)　プラネット

この図書館の最も特徴的な施設であり、アトリウムの中空にまさに〝プラネット（惑星）〟のように配置されたグループ閲覧室で館内に五基設置されている（**写真1**）。通常の音量での会話を認めており、教員によるゼミ授業、学生のグループ学習や自主的なゼミ活動などに有効利用されている。球体の壁面はすべてガラス張りとなっており、開放的な気分で利用できるとともに、外部からもプラネットで行われている真剣な議論や学びの様子が視界に入り、学生たちの学習意欲を誘発するといった相乗効果も発揮している。

写真1　アトリウム空間に配置された「プラネット」

(4)　開架書架エリア

アトリウム空間の両端（南北）各々に五層・計一〇フロアの開架書架エリアが配置されている。アトリウムから自動ドアを隔てたこのエリアは一切の私語、会話を禁止しており、一歩足を踏み入れると、アトリウムとは全く異なる静謐な空間となっている。開架図書数としては大規模な約五五万冊を

写真2　開架書架を取り囲む「クリスタルキャレル」

分野ごとに配置している。

(5)　クリスタルキャレル

プラネットと並び、この図書館の特徴的な施設であり、一階から五階までのすべての開架書架エリアの周りを取り巻くように配置された個室閲覧室である（**写真2**）。個室は同規模の図書館と比較しても非常に多い二六六室が設置されている。一切の私語、会話及び個室の複数人での利用を禁止しており、落ち着いた静かな閲覧環境が保たれている。約半数の個室にはパソコンが設置されている。パソコンの配置された個室の閲覧机は幅約一九〇センチあり、図書館の資料を大きく広げながらのレポート作成などが可能なため、パソコン教室ではなく情報図書館でパソコンを利用する学生は非常に多い。活気のあるアトリウム空間と異なり、ここは一人静かに集中して調査・研究や学習をする場として、アトリウムやプラネットと同様、学生に人気のある施設となっている。

〝クリスタルキャレル〟という名称のとおり、個人閲覧室ではあるが、プラネットと同様に全面ガラス張りとなっており、通路からはもちろん個室同士もお互いが見えるようになっている。クリスタルキャレルの並ぶエリアを歩くと、レポート作成や卒論執筆、あるいは自学自習に真剣に取り組む学生の姿が視界に入ってくる。セキュリティ面でのメリットもあるが、それ以上にこの空間においてもプラネットと同様、学生たちがお互いに学習意欲を誘発する、という効果が発揮されているように思える。

(6)　学部別カウンター

カウンターは館内に四カ所設置されており、本学が設置している四つの学部（経済・法・文・理工）にそれぞれ対応している。各学部担当カウンターにおいて、学部の図書予算の執行・管理、図書の発注・受け入れ・整理、学部の分野別のレファレンス、ゼミガイダンスにまで対応している。学部ごとの図書館利用者の傾向や蔵書構成等を把握した図書館職員が、きめ細かい利用者対応を行っている。

※　　※

以上のような特徴的な施設配置やカウンター構成により、先に述べた情報図書館設計のコンセプトを実現し、利用者の多様な学修スタイルに対応する図書館として日々サービスを提供している。

三　武蔵野地域住民への図書館開放

本学図書館では、成蹊大学の所在地である武蔵野市に加え、

市に隣接する三鷹市、小金井市、西東京市、杉並区、練馬区の住民の方へ館内閲覧サービスを提供している。公共図書館に所蔵がない、本学図書館所蔵の学術資料などを利用して、特定の研究をする方を対象としており、カード発行は有料となっているが、毎年必ず利用カードを更新するヘビーユーザーが何人もおり、館内で学生以上に真剣に研究活動に取り組んでいる姿をしばしば見かける。

四　東京四大学図書館相互利用

学習院、成城、武蔵、成蹊の四大学は、東京の私立旧制七年制高等学校という歴史でつながりがあり、現在でも四大学運動競技大会（通称・四大戦）などを持ち回りで開催しており、「東京四大学」と呼ばれているが、大学図書館においてもこの四大学で相互利用できる協定を結んでいる。通常、所属大学以外の図書館を利用する際には紹介状の発行が必要となるが、四大学所属の学生・教職員は紹介状なしで相互に大学図書館を利用可能となっている。利用については、館内閲覧のみではなく、申請により館外貸出にも対応している。四大学は東京近郊で相互の移動には少々時間がかかる距離があるが、年間を通して活発な相互利用が行われている。

また、東京四大学に、やはり私立旧制高等学校のつながりのある関西の甲南大学を加えた「五大学」という枠組みも存在し、五大学で開催する行事も各部署にて行われている。図書館では毎年秋ごろに五大学図書館懇談会を開催しており、図書館の運営や新しいサービスなどさまざまなテーマで有意義な情報交換を行っている。

五　今後の課題

先に述べた、多様な学修スタイルに対応する各種館内施設（ハードウエア）を効果的な学修支援機能へとつなげていくためには、今後はソフトウエア面、主に人的な学修支援体制や新しいサービスの提供が必要となってくる。

リフレッシュエリアについては、現在は単なる図書館に付随する飲食可能なエリアで、雰囲気は学生食堂と似た騒がしい空間となっているが、やはり図書館の施設でもあるので、単なる飲食可能な空間であることから一歩進めて、例えばプレゼンテーションを行える、各種ワークショップが開催される、ポスター展示研究発表が行われているなど、いわゆる〝アカデミック〟な空間にできないかといった意見が館内からも出ている。

学修支援については、多くの大学図書館で先進的な取り組みがすでに始まっているが、本学においても館内の学習会話可能な施設であるアトリウム、プラネットを有効活用できるサービスを構築していきたい。パソコンやデータベースなどの使い方に関する利用相談員、あるいは大学院生による学習相談員、レポート作成相談員の設置といったアイデアが、日頃利用者対応で苦労をしている図書館職員からも提案されており、今後大学や学部とも議論や情報交換をしながら、本学学生にとって最もふさわしい学修支援サービス体制を構築し、情報図書館の斬新な施設をより効果的に使っていきたい。

●変わる大学図書館と学修支援の広がり

特集

学修支援ツールとしての〈共読ライブラリー〉プロジェクト

——読書と学修支援の新しいカタチ

中嶋 康●帝京大学メディアライブラリーセンター グループリーダー

一 はじめに——共読ライブラリー導入の経緯

今、図書館は教育と連携した能動的学修支援が強く求められている。[*1] 帝京大学メディアライブラリーセンター（以下MELIC：メリック）[*2]でも直面する課題は大きく二つある。一つは資料の貸出数減少への対策であり、一つは限られた職員数で学修支援などの図書館が行うべき教育的役割の増加に対応することである。

私たちは、この二つの一見関係ないように見える課題が、実は密接にリンクしていると考えた。なぜなら、本来なら大学の授業が一方向的な受け身の授業形態から能動的学修を前提とした授業形態へと変わっていくことで、授業内のグループワークや授業外学習の機会が増加し、図書館の利用が活性化し、資料の貸出も増加するはずだからだ。ところが実際には、一連の授業改善の取り組みと相反して資料貸出数の減少には歯止めがかかっていない。そこでMELICでは、資料の貸出増加と学修支援を相互に連環させて実施する、新たな読書推進プロジェクトを開始した。

それが、帝京大学と編集工学研究所（松岡正剛[*3]主宰）が二〇一二年より始めた四年計画の共同プロジェクト、〈共読ライブラリー〉である。

二 プロジェクトの全体像

〈共読ライブラリー〉プロジェクトは、「共読」をキーワードに読書の方法、図書館という環境、大学における学びを再構成し、図書館のブランディングから大学のブランディングへと展開する中で、読書推進と学修支援を有機的に結合し発展させることを企図したものだ。[*4]

それでは「共読」とはどのようなイメージなのか。私たちは〈共読ライブラリー〉の基本的コンセプトを表すキャッチコピーとして「薦めあい」「読みあい」「評しあう」という言葉を使っている。すべてのシステムと同様に、読書も「読む」という「入力」だけでなく、薦めあったり評しあうという「出力」が重要になる。なぜなら、読んだ情報は「出力」の過程

で再構成され、新たな発見や感動が生まれ、理解が深まることで主体的で充実した読書になるからだ。つまり、読書を単独の行為に終わらせず、読んだ情報が「出力」され、「出力」された情報に触発され、新たな読書が始まるという循環の仕組みが必要なのだ。読書が衰退しているのは、この循環の仕組みが機能不全を起こしているからかもしれない。ということは、大学というコミュニティの中に読書に関する情報がつねに循環する仕組み（システム）をつくることで、読書が楽しく魅力的な行為になっていくはずだ。

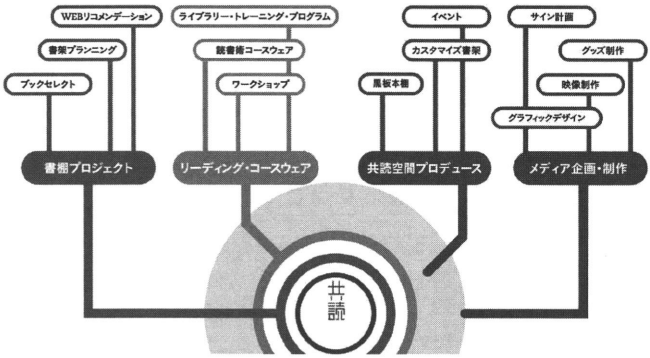
この「共読」の概念を使い、読書に通じるさまざまな仕掛けを用意して総合的で継続的なプログラムを実施することで、主体的な読書行動を習慣化し、学習基礎力の底上げを支援し、学士力向上と情報編集技法の獲得を目指す学修支援の仕組みが〈共読ライブラリー〉プロジェクトである。

三　共読ライブラリーの四つのメニュー

このプロジェクトでは、〈共読ライブラリー〉が目指す読書推進と学修支援の仕組みを実現するための、四つのメニューを展開している。

(1)　書棚プロジェクト
(2)　読書術コースウェア
(3)　共読空間構築
(4)　広報・プロモーション

図1　共読ライブラリーの4つのメニュー



これらの四つのメニューは、①新たな読書の楽しみ方や読書自体の魅力を発信するアプローチと、②情報リテラシー教育支援の中で「読書のためのスキル」を学ぶことにより、能動的でより深い理解を可能にする読書を目指すアプローチに分けられる。〈共読ライブラリー〉は、二つのアプローチを戦略的に実施することで読書推進と能動的学修支援の両方を有機的に連携させながら推進していくプロジェクトなのだ。

読書自体の魅力を発信するアプローチでは、MELIC内の黒板仕様の書架（MONDO書架）を使い、学生同士、教職員、著名人などが本に関する問答（MONDO）を繰り広げる企画や、授業内、MELICのガイダンス、イベントから生まれる多様なリコメンド情報を発信する仕組みを構築している。さらにこのリコメンド情報を、OPACの書評システムやMELICホームページ、TwitterやFacebookへと転載、リ

図3　黒板書架のコメント

図2　MONDO書架群

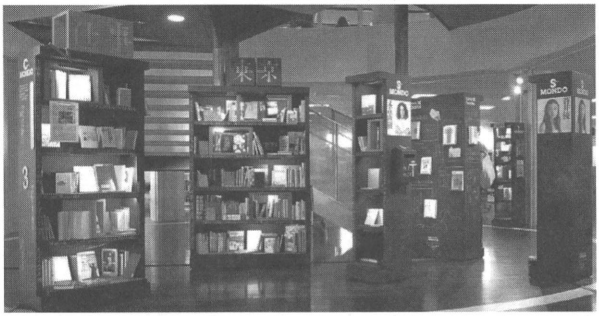


図4　情報発信強化のためホームページを刷新

ンクすることで、読書情報が活発に循環する仕組みを目指している。

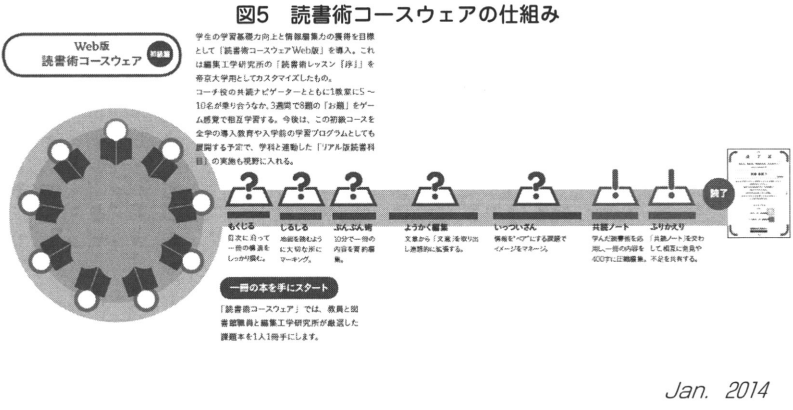
この書棚プロジェクトを中心としたリコメンド情報の発信と循環、共読環境整備については、すでにいくつかの図書館関連の雑誌に掲載したので、詳しくはそちらをご一読いただければ幸いである。[*5]

本稿では、教育と連携した「読書術コースウェア」の実施について紹介させていただく。

四　学修支援ツールとしての読書術コースウェア

「読書術コースウェア」は、受動的読書を能動的読書へと転換するコツと基本的な読書スキルを学ぶことで、スムーズにアカデミックリーディングへと接続し、それによって情報リテラシーの向上を図り、能動的学

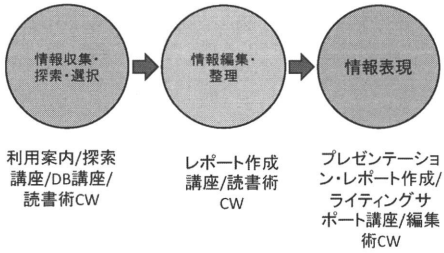
図5　読書術コースウェアの仕組み



修を支援するツールだ。つまり、アカデミックリーディングという学術文献や専門書を研究レベルで読み解くための読書法ではなく、より一般的で汎用的な読書への入り口なのだ。

このコースウェアは、松岡氏のイシス編集学校の読書術レッスンを帝京大学の学生向けにアレンジし、三週間のオンライン読書術コースにしたものだ。学生はウェブ上で七、八名一組のグループになり、各グループに一名のナビゲーター（編集学校の講師）がつく。自分の選んだ課題本（新書）を読みつつ、ナビゲーターが出題する全八問の読書術レッスンに回答していく。ウェブ上の掲示板システムで他のメンバーの回答を読むこともできるため、自分が選ばなかった本も他人の回答を通して「共読」できる仕組みだ。

図6　情報リテラシーのプロセス



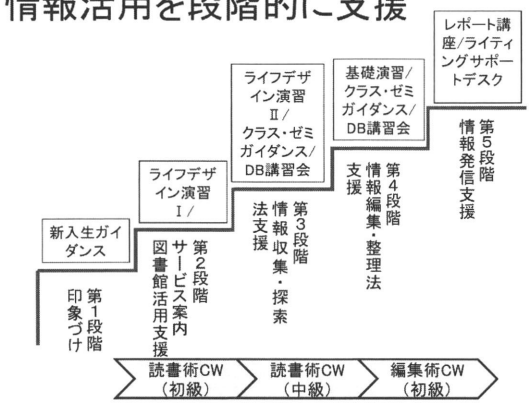
五　読書リテラシー教育支援の位置づけ

MELICでは、これまでも情報リテラシー教育支援計画を「情報リテラシーのプロセス」（**図6**）と「学生の情報活用の段階」（**図7**）[*6]に沿って作成している。〈共読ライブラリー〉プロジェクト実施を機に、読書リテラシー教育支援を計画に加えて以下のように展開することにした。

「読書術コースウェア」は、「学生の情報活用の段階」（**図7**）では第二・三段階：導入教育の段階で、学術文献読解のためのアカデミックリーディングは第三・四段階：専門課程の開始前（二年生）の段階に位置づけることにした。受動的読書から能動的読書への転換プロセスを意識したこの「読書術コースウェア」は、導入教育レベルで習得する読書スキルとしてふさわしいと考えたからだ。

二〇一二年度は教育学部一年生に試行的に導入し、二〇一三年度は教育学部に加え、史学科と短期大学の一年生に実施

図7　学生の情報活用の段階



した。受講した学生からは達成感とともに、「本を興味深く読めた」「本の読み方が変わった」などの前向きな感想も挙がっている一方で、最後の課題まで修了した修了率は昨年度で七二％、今年度は五三％程度にとどまっている。

最終的には情報リテラシーの基本的スキルとして八王子キャンパスの全学部に展開していきたいのだが、読書自体に関心の薄い学生への動機づけ、大学の授業内容との調整、担当教員の理解と関心が学生の修了率に大きく影響することなど、そのために対処すべき課題も見えてきた。

多くの課題はあるが、学修支援ツールとしての役割は、大学が〈共読ライブラリー〉に期待する重要な要素であり、それゆえ企画として失敗できない部分である。

六　今後の「読書術コースウェア」の展開

現在、「読書術コースウェア」は帝京版へのカスタマイズの過程であり、全学展開という目標実現にはもう少し時間が必要だ。アカデミックリーディングの教育支援も含めて、早急に読書リテラシー教育支援のための全体計画を立案したいと考えている。

読書術コースウェア自体の改良を行う一方、実施過程の改善も進めている。

特に、コースウェア書評大賞の設定は早急に実施したい項目だ。コースウェアの最終課題である「課題本の四〇〇字リコメンド」から優秀なものを選び、表彰することで喜びを実感してもらい、コースウェアのインセンティブとするものだ。その他、ＭＥＬＩＣ内の黒板書架でコースウェアの進行をレポートする「コースウェアの見える化」や、コースウェアにリアルの授業要素を加えて、ハイブリッドな読書リテラシー講座や授業化への展開を目指したいと考えている。

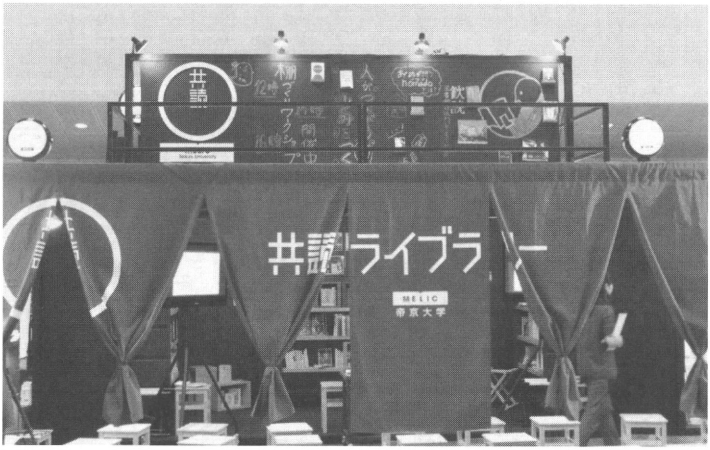
七　まとめ

今回は、〈共読ライブラリー〉プロジェクトがもつ二つの戦略的アプローチの中で、情報リテラシー教育支援の一つとして、「読書術コースウェア」により読書リテラシーの向上を図り読書推進につなげるアプローチを軸に述べた。

私たちは当初から、サークルやデートやバイトで手一杯の読書から最も遠い位置にいる大学生を振り向かせる読書の仕掛けをつくらなければ、「読書推進」はＭＥＬＩＣ周辺の同好会的企画に終わってしまうと考えていた。つまり〈共読ライブラリー〉は、「読書する学生がカッコよく見える仕掛け」と「大学全体で読書する仕組み」を実現するプロジェクトだとも言える。これは言い換えれば〈共読ライブラリー〉が大学ブランドとして確立していかなければならないということだ。

今、プロジェクトは四年計画の半分が過ぎようとしている。目標の大きさに比べると残る二年という期間は短いが、二つのアプローチを戦略的に実施しながらその目標に近づきたい

図8　図書館総合展2013に出展



と考えている。

●注及び参考文献

＊1　文部科学省、科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）」二〇一三年八月　http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2013/08/21/1338889_1.pdf（二〇一三年十二月一日参照）

＊2　八王子キャンパスにあるMELICは、人文・社会科学系の六学部一一学科、短期大学部二学科で構成、学生数は約一万八〇〇〇人（全学生数約二万四〇〇〇人）。入館者数約七五万人（二〇一二年度）、蔵書数六八万冊、職員数一三名（パート、委託は除く）である。

＊3　一九四四年京都生まれ。東京大学客員教授、帝塚山学院大学教授を経て編集工学研究所所長、イシス編集学校校長。一九七一年『遊』を創刊し編集長を務める。二〇〇〇年にウェブ上で「松岡正剛千夜千冊」をスタート。

＊4　プロジェクトの全体像についてはMELICホームページに詳細を掲載している。https://appsv.main.teikyo-u.ac.jp/tosho/tos-kyodoku.html

＊5　〈共読ライブラリー〉全般については以下に詳しい。

・中嶋康・辺見純子「〈共読ライブラリー〉が創る「人」「本」「学び」の未来―帝京大学メディアライブラリーセンターにおける学修支援―」『大学図書館研究』九七号、二〇一三年三月、1～12ページ

・辺見純子・中嶋康「「共読ライブラリー」初めてのフォーラム&ブース出展記―図書館総合展「見る」から「出る」への三六五日―」『薬学図書館』五八巻二号、二〇一三年二月、105～111ページ

・堀野貞美・中満恒子「「薦めあい、読みあい、評しあう」新しい読書のカタチと学修支援：帝京大学「共読ライブラリー」の試み」『図書館雑誌』一〇七巻九号・通巻一〇七八号、二〇一三年九月、568～570ページ

＊6　日本図書館協会図書館利用教育委員会編『図書館利用教育ハンドブック』大学図書館版、日本図書館協会、二〇〇三年